

【小論文】 出題意図・解答例

問題 1

【出題意図】

1. 倫理的思考力と看護観の明示

- この設問は、受験者が日々の看護実践の中で「倫理的課題」をどのように捉え、向き合っているかを明らかにすることを目的としています。
- 専門職としての倫理観・価値観（看護観）を問うものであり、「正解」を求めるといよりも、受験者独自の視点と問題意識が評価の中心です。

2. 具体的な実践経験に基づく記述

- 「あなたの看護実践を踏まえて」とあるように、実際に直面した場面や体験に基づいて、倫理的葛藤やジレンマ、課題の具体性・現実性を記述することが求められています。
- 単なる理論や抽象論ではなく、現場での具体的なエピソードと、その背景にある問題構造をどれだけ深く描けるかがカギです。

3. 課題解決力と構想力の評価

- 設問後半の「その解決策について、あなたの意見を述べてください」は、倫理的課題に対する看護職としての対応力・思考の柔軟性・実践的判断力を評価するポイントです。
- 理想論ではなく、現実的かつ論理的に実行可能な提案が期待されています。
- あわせて、大学院進学後にどのような研究や実践に発展させたいかという視野があると、説得力が増します。

4. 看護職としての専門的自覚と社会性

- 「保健医療福祉の専門職者として」という書き出しからもわかるように、単なる個人的な意見に留まらず、職業倫理・対人支援職としての立場・社会的責任感を前提とした論述が求められます。

<出題者が受験者に求めていること>

- あなた自身が現場で何に違和感を抱き、どんな葛藤を覚えたのかを明確に書けること
- 倫理的にどう判断し、どう行動したか（あるいはしなかったか）を客観的かつ自己内省的に記述できること
- その経験を通して、自分はどのような看護を目指したいかという将来展望を語れること

## 【解答例】

私が看護実践の中で直面した倫理的課題は、「患者本人の意思と家族の意向が食い違う状況において、どのように意思決定支援を行うか」という点である。特に終末期医療の場面では、患者が延命治療を望まず、自然な形で最期を迎えたいと意思表示しているにもかかわらず、家族が「まだ生きていてほしい」という強い感情から、積極的な治療の継続を望むことがある。看護師として、患者の意思を尊重しながらも、家族の不安や悲しみにも寄り添う必要があり、葛藤を感じた。

このような場面では、看護師の役割は単なるケアの提供者にとどまらず、倫理的な調整者としての立場が求められる。患者の意思を尊重することは、看護の基本的倫理原則である「自律性の尊重」に基づいているが、同時に家族との関係を悪化させることは、患者にとって望ましくない結果を生む可能性もある。そのため、患者と家族の双方の価値観や背景に配慮した上での「意思決定支援のプロセス」が必要であると考えます。

この課題に対して、私はまず、患者の意思を丁寧に傾聴し、記録に残すことを徹底した。また、医師やソーシャルワーカーと連携し、家族に対しても十分な説明の機会を設け、患者の思いを代弁する形で共有した。さらに、ACP（アドバンス・ケア・プランニング）の導入を試み、患者と家族がともに将来の医療の選択について話し合えるよう支援を行った。こうしたプロセスを通じて、家族も次第に患者の思いを受け入れ、穏やかな最期を迎えることができた。

今後、看護師が倫理的課題に主体的に向き合うためには、倫理的判断力を養う教育や、現場で気軽に相談できる倫理カンファレンスの体制整備が必要であると考えます。私は大学院で、意思決定支援に関する理論や実践について学びを深め、倫理的ジレンマに直面した際に、患者と家族双方にとってよりよい選択ができる看護を探究していきたい。

## 問題2

### 【出題意図】

チーム医療において、「協働」は重要であり、医学・看護学それぞれのモデルコアカリキュラムにおいても、その重要性が述べられている。それは、臨床においても、教育現場においても同様であり、「協働」を考える上では、互いの役割の視点から考えることも重要となる。今後は、さらに「協働」の重要性が高まると思われ、看護職としての立場から、また、多職種から見た看護職の役割を理解した上でのとらえ方が重要となってくると考えた。

### 【解答例】

現在は、働き方改革や少子高齢化によって医療現場では医療需給の逼迫が深刻化している。その中でより高度で安全、かつ効率的な医療を患者に提供するためには、協働の推進は必要不可欠であると考えます。

臨床においては、在院日数の短縮に伴い、入院時から退院後を見据えたかかわりが重要視されている。入院時から多職種で関わり、退院に向けてカンファレンスを行い、患者が今までの状況に近い日常生活が送れるような支援が検討されている。私達の病棟でも、定期的に多職種が参加する退院支援カンファレンスが行われており、多職種間での情報の共有が可能となったことから、スムーズな退院支援につながっている。

このように協働は、医療の質と安全性を保つために重要である。それぞれの専門職が協力して情報を共有し、治療方針やケアの方向性などを確認し合うことで、患者へのより良い医療の提供に資することができ、医療事故の防止や医療の効率性を向上させることにもつながる。

しかし、協働の課題として、他職種の専門性に対する理解ができていないことが挙げられる。職種により対応する分野が異なるため、それぞれの意見がぶつかり同じ目標に向かっていくのが難しくなる場合も想定される。また、経験年数の差などによって、自然と上下関係が生まれてしまうことで、協働の目的が果たせなくなる可能性もある。患者のことを第一に考えて治療やケアを行うために、それぞれの職種の専門性を理解し合って、柔軟に対応出来ることを目指したい。

そこで、よりよい協働を行うために、意識的にコミュニケーションをとり、互いを尊重する姿勢をもつことが重要と考える。こうした情報共有の促進を行うことで、質の高い医療の提供が可能となり、患者満足度の向上が期待できると考える。